



桐生正幸教授
社会学部 社会心理学科

きりうまさゆき

山形県警察本部科学捜査研究所主任研究官、2004年、博士(東亜大学・学術)を経て、関西国際大学人間学部教授。防犯・防災研究所長、日本犯罪心理学会全国理事、日本法科学技術学会評議員、日本応用心理学会理事も務める。2014年より現職。

事件は世間の負を読み解くキーワード。 犯罪心理学の根底にも哲学があります。

近年、テレビなどでも取り上げられる機会が増え、一般的に知られるようになってきた犯罪者プロファイリング。これは、犯罪心理学という研究の中で生まれた、難解な事件を読み解く手段のひとつである。

この犯罪心理学を、事件の最前線となる警察機関で探求してきた桐生正幸教授。インタラクティブな講義を念頭に置き、2014年度から本学の教壇に立っている。

現場で学んだ 犯罪者プロファイリング

大学で心理学を専攻していたことから、それが活かされる仕事を求めて公務員の採用試験を受験。児童相談所とかに行くのかなと思ったら、これが警察本部でして…。そして科学捜査研究所、いわゆる科捜研に入りました。

科捜研とは、警察本部に設置されている研究機関で、担当分野には大きくわけて法医学、化学、工学、筆跡鑑定、心理学があります。これらを使って、捜査の手助けをするわけです。

私はこの科捜研に、20年以上在籍していましたが、私が入所した当初、心理学を使った捜査のベースとなっていたのはポリグラフ検査。つまりウソ発見器を使った作業です。

それ以前の犯罪心理学というのは、犯罪者更生に関する研究が主流でしたから、プロファイリングが出てきたときには、現場ですべてを学ぶことになりました。

プロファイリングは、膨大なデータベースを高度な統計で分析する作業。過去に起こった事件の犯人像や犯行状況などを参考にすることで、未解決事件の犯人である可能性が高い人物像を推定していきます。例えば連続放火魔が生活の拠点としている場所などが、プロファイリングによって推測できることもあります。

いま世間を騒がせている あの事件も!?

犯罪心理学の研究という点では、犯罪の最前線とも言える科捜研は、もっとも適した場所でした。しかし人生は一度きり。別のこ

とも経験してみたくて、いまは大学で研究を続けています。

現場から離れたことで、まだ世間にはあまり理解されていない犯罪心理学について、伝えやすい環境になった利点があります。テレビの「世界一受けたい授業」への出演も、そんな活動のひとつですね。

東洋大学の講義では、より詳しくフレッシュな内容で、犯罪心理学の世界を知ることができます。「犯罪心理学A」などの講義では、なるべく最新の事件を取り上げていきます。基礎的な理論をただ学ぶだけでなく、いま実際に起きている未解決事件も読み解いていきます。

またゼミでは、「キャンパス内と周辺の安全マップづくり」という研究も行っています。これにより、防犯について考えるきっかけになるだけでなく、周辺調査では近隣の方々がいるおかげで学生生活が守られていることも理解できます。社会にコミットするということでは、防犯というテーマは優れたアイテムです。

つねに考え、基本と応用を大切に

東洋大学の柱には「哲学」がありますが、これは犯罪心理学も同じ。世の中のネガティブな部分は、すべて犯罪に表れていますが、事件の根底には、いつも「なぜ人を殺してはいけないのか?」「なぜ罪を犯すのか」という問いが必要です。それを考えていかなければ、事件を自分とは別世界の話としてしか、捉えられなくなります。犯罪心理学に限らず、「つねに考える」という姿勢が、社会で生きるために必要なことだと思います。

そして大切なのは「基本と応用」。皆さんには、基本としての勉強だけでなく、それを社会で活用していく能力についても身につけてもらいたいと思っています。